

高原町文化財調査報告書 第14集

町 内 遺 跡 V

2005. 3

みや ざき けん にし もろ かた ぐん
宮 崎 県 西 諸 県 郡

たか はる ちょう
高 原 町 教 育 委 員 会

高原町文化財調査報告書 第14集

町 内 遺 跡 V

2005. 3

みや ぎき けん にし もろ かた ぐん
宮 崎 県 西 諸 県 郡
たか はる ちょう
高 原 町 教 育 委 員 会

序 文

高原町教育委員会では、平成8年以来、文化庁及び宮崎県教育委員会の補助を受けて、町内での遺跡地図の整備を実施する一方、様々な開発事業等に伴う試掘・確認調査や本発掘調査を実施しました。

今回の報告書には、平成15年度から平成16年度にかけて実施した、宇都地区圃場整備事業に伴う遺跡確認を目的とした試掘調査の成果を掲載しております。

今回の試掘調査は、狭野地区に続き2例目です。地権者は関係諸機関の協力をいただきながら調査を進めたところ、これまで全く予想されていなかった箇所から遺跡が確認されました。町の歴史を考える上でも大きな成果です。

今回掲載した成果が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習などあらゆる場面で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助になることを期待いたします。

最後になりましたが、この発掘調査にあたり、御理解をいただきました土地所有者の方々をはじめ、御指導・御援助をいただきました関係諸機関並びに地元の方々に、心から御礼を申し上げます。

今後とも、本町の文化財行政に対する御指導・御協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成17年3月

高原町教育委員会
教育長 外山方圀

例 言

1. 本書は、高原町教育委員会が文化庁及び宮崎県教育委員会の補助を受けて、平成15年度から16年度にかけて実施した、宇都地区園場整備事業に伴う遺跡確認のため実施した試掘調査の報告書である。

2. 調査関係者は、次の通りである。

調査主体	高原町教育委員会	
	教 育 長	外 山 方 圓
	社会教育課 課 長	黒 木 嘉 民
	係 長	益 本 一 博
調 査 員	社会教育課 主 事	大 學 康 宏
調査指導	宮崎県教育委員会文化課	飯 田 博 之
調査協力	宮崎県西諸県農林振興局農地整備課 高原町役場農村整備課 地権者ならびに作業員のみなさん	

3. 本書で使用している図面・写真については大學が作成した。

4. 本書の執筆・編集は大學が行った。

5. 本書で使用した方位は、全て磁北である。

6. 調査の記録類、出土遺物等は、全て高原町教育委員会で保管している。

本文目次

序 文	
例 言	
本文目次	
挿図目次	
図版目次	

第Ⅰ章 高原町の環境及び歴史	1
第1節 自然面における高原町の環境	1
第2節 埋蔵文化財から見た高原町の歴史	4
第3節 高原町の歴史	7
第Ⅱ章 宇都地区圃場整備事業に伴う試掘調査	15
第1節 遺跡の概要及び調査にいたる経緯	15
第2節 調査組織	15
第3節 調査の成果	16
第4節 まとめ	17

挿 図 目 次

第1図 霧島火山群及び周辺地形図・遺跡位置図	2
第2図 高原町及び町内遺跡位置図	3
第3図 報告書掲載地区位置図	13
第4図 宇都地区試掘調査における地区位置図	19
第5図 宇都地区試掘坑位置図	21
第6図 宇都地区試掘坑層序(1)	23
第7図 宇都地区試掘坑層序(2)	24
第8図 宇都地区試掘坑層序(3)	25

圖 版 目 次

圖版 1	地区 (1) 遠景、Tr-1・2 層序	27
圖版 2	地区 (2) 遠景、Tr-3・4 層序	28
圖版 3	Tr-5・6 層序、地区 (3) 遠景	29
圖版 4	Tr-7・8・9 層序	30
圖版 5	Tr-10・11 層序、地区 (5) 遠景	31
圖版 6	Tr-12・13 層序、地区 (6) 遠景	32
圖版 7	Tr-14・15・16 層序	33
圖版 8	Tr-17 層序、地区 (7) 遠景、Tr-18 層序	34
圖版 9	Tr-19・20・21 層序	35
圖版 10	佐土遺跡表採縄文土器(1)	36

第I章 高原町の環境及び歴史（第1・2図）

第1節 自然面における高原町の環境（第1図）

高原町は、宮崎県の南西部、霧島山系の麓に位置している。町域は東西約18km・南北10km、東西に長く、面積は85.42km²である。韓国岳（標高1700m）や新燃岳（1421m）・夷守岳（1344m）・高千穂峰（標高1574m）などを中心とする霧島火山群を鹿児島県との県境に持ち、南東部は鹿児島県曾根郡霧島町、南部及びその周囲は宮崎県都城市・北諸県郡山田町・高崎町、町北部を流れる岩瀬川を境に西諸県郡野尻町、霧島山系及び北部は小林市とそれぞれ接している。市街地は町のほぼ中心部、岩瀬川の支流である辻の堂川の南方、標高約200m前後の台地に位置している。町内の殆どは広大な台地とその周囲を巡る谷で占められ、そのうち山林・原野は、町域の約50%を占めている。

高原町の背後にある霧島火山群は、西南日本外帯である四万十層群上に立地する大小23座の火山群で、第3紀終末～第4紀から現在に至るまで活発な火山活動を展開している。火山群の活動時期は新古2期に分かれ、古期は約60～50万年前、加久藤・小林カルデラ（えびの市～小林市）の形成から始まり、主に火山帯西側（えびの・鹿児島県吉松町方面）の火山形成に終始している。これらの火山は浸食がかなり進んでおり、火口の形がはっきりしないものが多い。新期は約10万年からで、古期火山帯を土台として様々な火山が形成され、高千穂火山帯を除いてほぼ現在に近い状況となった。

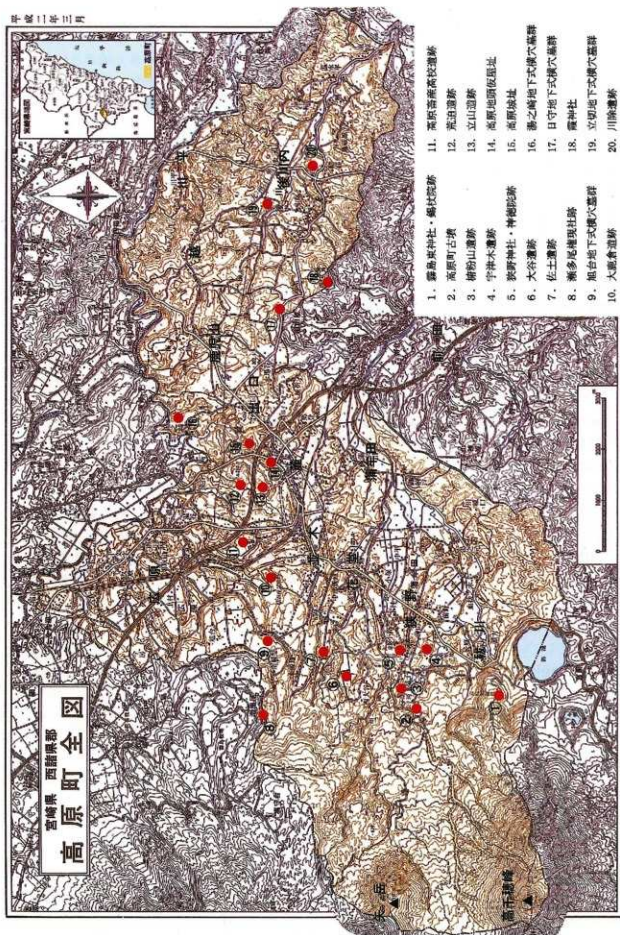
高原町に近い高千穂火山は、霧島火山群の中でも比較的新しい部類に入り、約1万年前辺りから活動を開始する。ニッ石岳・古高千穂峰・高千穂峰・御池・御鉢の順に形成され、火口が残存しているのは御池・御鉢のみである。特に御池は、霧島火山帯の中で最も標高の低い所で噴火した火山で、約4,200年前にマグマ水蒸気爆発を起こし、周囲に「御池軽石」と呼ばれる黄灰色の軽石を降下させた、霧島火山群最大の火口湖である。又、御鉢は、隣接する新燃岳と共に活発な活動を繰り返してきた。文献上での最古の噴火は延暦7年（788）だが、最大の噴火は文暦元年（1234）で、社寺の記録に多く記されている。しかし、文暦元年の噴火については、文献の多くが近世末期に作成されているので真偽は不明である。この他にも江戸時代半ばや、明治20年（1887）から37年（1903）を中心とした明治～大正年間にも数多くの噴火を繰り返し、現在でも噴煙を常に上げている。

このような環境下にあるため、高原町を形成している地層は霧島火山群をはじめとした火山の噴出物が基礎となっている。しかし、高原町内で最も厚く堆積し、現在の地勢を作っているのはシラスである。シラスは、約24,000～25,000年前に始良カルデラ（現在の錦江湾近辺）から噴出した火山灰で、「始良大隅軽石」「入戸火砕流堆積物」「始良丹沢（A.T）火山灰」等で構成されている。後期旧石器時代最大の噴火で、その火山灰は北海道を除く日本列島をはじめ、韓国ソウル・中国山東省・フィリピン海・ロシアナホトカ近郊にまで降下した。高原町の地勢は、大規模に発生した入戸火砕流の堆積物で構成され、その厚さは多い所では約20m程にもなる。この堆積した台地はシラス台地と呼ばれ、標高は約200m前後で広い平坦面を有し、周囲には高低差20m程の「迫」と呼ばれる谷が巡っている。谷には水源が多く、町内でも多くの支流が発生し、大淀川へと流れている。

シラス堆積後も、霧島山系の火山灰が次々に堆積し、ながら「火山灰の博物館」という



第1図 霧島火山群及び周辺地形図・遺跡位置図



第2図 高原町及び町内遺跡位置図

状態になっている。しかし、火山灰の1枚1枚が分厚いため、発掘調査で見る事が出来るのは、御池ボラ層、もしくはアカホヤ火山灰までである。特にここ数年は高千穂峰麓での調査が多かったため、御池ボラ層より上の、古代から中世にかけての火山灰が多く確認された。その中で最も有名なのが「(霧島) 高原スコリア (Kr-Th)」である。Kr-Thは高千穂峰の西側に位置する御鉢 (標高1206m) の噴出物である。年代については、1980年代には延暦7年(788)と推定されていたが、1990年代半ばにKr-Thの下層から9世紀後半から10世紀前半の土師器が確認されたため、再考の結果、文暦元年(1234)と推定された。しかし、年代推定の根拠となった史料のほぼ全てが近世末期に作成されているため、史料の信憑性について疑問が出ている。その結果、現状では11世紀から15世紀半ばの広い範囲で考えられている。又、Kr-Thの下層からは、青灰色でやや硬質の宮杉スコリア (Kr-Ms)・Kr-Thと同じ黒褐色の片添スコリア (Kr-Kz) が検出されている。このうち、高原町荒迫遺跡では、Kr-Msの下層から古代の畠遺構が検出され、高原町の粉粉山遺跡・宇津木遺跡では、Kr-Kzの下層から古代の畠遺構や9世紀後半から10世紀前半にかけての土師器・須恵器が出土している。荒迫・宇津木遺跡は、土器形式からほぼ同時期に形成されている事がわかり、Kr-Ms・Kr-Kz 2種の火山灰が非常に近い時期に降下したと考えられる。さらに、Kr-Ms・Kr-Kzの間には「霧島大谷第2テフラ (Ot-2)」と呼ばれる赤色軟質火山灰層が入っており、この時期頻繁に噴火を繰り返していた事が窺える。但し、Kr-Ms・Kr-Kz・Ot-2、この3つの火山灰は高原町でしか検出されていないので、今後の資料増加が望まれる。

その後中世に入ると、御鉢が頻繁に噴火を繰り返すようになる。宇津木遺跡では、Kr-Thより上層で、年代の比定されていない幾つかの御鉢起源の火山灰が確認された。近世に入ると、御鉢だけでなく新燃岳も活動が活発化し、享保元年(1716)から2年(1717)には、新燃岳が大噴火を起こした。この火山灰は遠く宮崎市近辺でも確認される程の大きな噴火で、噴火から数年は高原から全ての住民が避難させ、周辺の経済を大きく停滞させる程の災害であった。

明治時代に入ると、大きな噴火はするものの、近世に較べると落ち着きを見せたようである。それでも御鉢は、明治13年(1880)から活動を再開し、明治20年(1887)からは毎年1～2回噴火し始め、明治28年(1894)～29年(1895)にかけて死者や家屋焼失などの被害が出た。その後大正12年(1923)頃までは活発噴火活動を繰り返していたが、その後大きな活動は起こしていない。ここ最近では、昭和34年(1959)の新燃岳のが一番大きな噴火であった。又、ここ10年の間に、新燃岳・御鉢で臨時火山情報が出され、山への立入禁止措置が幾度か成された。

第2節 埋蔵文化財の面から見た高原町の歴史(第2図)

次に、これまで行われた発掘調査の成果から高原町の歴史を推測する。しかし、上記のようにシラスをはじめ様々な火山灰が厚く堆積しているため、古い時代になると、調査すること自体が不可能な状態にある。よって、旧石器時代の遺跡は今のところ発見されていない。現在のところ確認できる時代は、縄文時代早期からである。高原町の市街地、標高約200m級の広大な台地に位置する荒迫遺跡では、発掘調査の結果、D地区より縄文時代早期に位置付けられている「塞ノ神式土器」が1点出土した。縄文時代早期の遺物が確認されているのは、

現在のところこれのみである。

縄文時代前期以後になると、遺跡数がわずかではあるが増加する。高原町の東側、後川内地区に位置する川除遺跡では、古代の畠遺構を構成する土層から森B式の破片が数点確認された。又、大谷遺跡でも、表探資料の中に曾畑式が数点確認された。

縄文時代中～後期になると、遺跡数・出土量共に増加の一端を迎る。昭和43年に発掘調査され、高原町で初めて縄文・弥生時代の遺物が層位的に確認された高原畜産高校遺跡や、平成11～12年度に調査した柿粉山遺跡・前述の荒迫遺跡などで阿高式土器が出土している。

縄文時代中期末から後期に入ると、遺跡の数（というよりも遺物量）が爆発的に増大する。高原町で発見された遺跡の殆どが縄文時代後期の土器を含んでいるといっても過言ではない。主な遺跡としては、前述した高原畜産高校遺跡、霧島火山群の麓に位置し、莫大な表探資料を抱える大谷遺跡・佐土遺跡、前述の柿粉山遺跡などである。しかし、これら遺物については、遺構を伴って出土していないため、遺跡の性格は不明である。ただ、大谷遺跡や佐土遺跡は丸尾式を中心として、北久根山式や西平式等が多いのに比べ、柿粉山遺跡では市来・丸尾式が殆ど見られず、磨消縄文系もごくわずかしか見られない。その代わり、綾式や宿毛式らしきもの、それらをミックスしたようなものも多く見られ、谷を挟んだ非常に近い場所でも文化及び時期の相違が見られる。

これより先、縄文時代晩期頃から遺跡数が激減する。特に、弥生時代の遺跡は殆ど見られない。理由の一つに挙げられるのは、調査数の少なさによる。特に高原町では開発が早い時期に行われたため、主要な遺跡の殆どが調査の機会なく破壊されてしまっている。弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が調査されたのは、立山遺跡・荒迫遺跡のみである。このうち、荒迫遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての住居址や掘立柱建物・土坑・溝などの遺構が検出された。しかし、遺構の検出状況から密集した集落とは言いがたい。又、荒迫遺跡の、高速道路を挟んだ南側に位置する立山遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡が30基近く検出され、さらに軽石製の炉や埋甕などの住居跡付随遺構が検出された。

高原町における古墳時代の遺跡は、集落遺跡よりも地下式横穴墓の方が著名である。高原町では、これまでに4群107基が検出されている。その内訳は、湯之崎地下式横穴墓群1基・旭台地下式横穴墓群13基・日守地下式横穴墓群31基・立切地下式横穴墓群72基である。

湯之崎地下式横穴墓は、昭和47年11月に整地作業中に発見・調査された。1基のみの検出だったが、4体程の埋葬人骨が見られた他、刀子・鉄鏃・鉈など11点の副葬品が見られた。この調査は開発途中での発見であったため、発見遺構の周辺部の調査は実施していないが、1基だけでなく群を形成していると思われる。

旭台地下式横穴墓群は、昭和50年12月に土木作業中の崩落により発見・調査されたが、殆どが天井部落下による損傷を受けるなど残存状況はあまり良くなかった。しかし、9号墓では鉈・鉄釧が出土した他、全体として約100点近い鉄製副葬品が出土した。後の研究により、埋葬位置から直線配置埋葬のA群、円形配置のB～D群に分類され、他群に比べてのA群の優位性が指摘されている。又、この調査以外にも同地で地下式横穴墓が発見されたという話もあり、実際はより広範囲に渡って墓が存在していたと推測される。

日守地下式横穴墓群は、高原町と高崎町の境界（北諸県郡高崎町大字前田字飯屋尾）に広がる地下式横穴墓群である。高崎町側では、昭和44年の九州縦貫自動車道に伴う緊急分布調

査や、昭和44・45年の採土作業に伴って9基発見されており、群が認識されていたが、そこまで重要視はされていなかったようである。しかし、昭和54・55年に渡って高原町側で採土作業が始まり、その作業中に計8基発見された。発見された8基の中には、東柱のレリーフの他、シラスを敷いた屍床や塗朱痕・天井部の彩色線文などの特異な埋葬状況が見られた。それらの成果を受けて、昭和56年に群で最も標高の高い地点の確認調査を実施した結果、10基の地下式横穴墓・土器溜りなどが検出された。又、平成9年2月には、道路を挟んだ南側の町境付近で2基検出され、蛇行剣や異形鉄鏃等が出土した。蛇行剣の出土は、日守群内では初めてであった。平成10・11年には天理大学考古学研究室が、昭和56年度に確認調査した地点で電気・レーダー探査を実施し、空洞反応等を利用した墳丘復元や玄室内の未発掘デジタルカメラ撮影などが試みられた。その結果、昭和56年度の調査では拾う事の出来なかった新たな地下式横穴墓も発見された。又、同年度調査地区より東側には殆ど見られず、群の中心は同年度調査地区より南・西側に分布している事が判明した。

立切地下式横穴墓群は、昭和63年12月に圃場整備中に発見され、2箇年に渡り発掘調査が行われた結果、72基というこれまでにない量の地下式横穴墓が検出された。群内には赤色顔料を使用して垂木や棟木を表現したものが多く見られた他、レリーフ状の東柱なども見られた。又、埋葬人骨77体、刀剣や刀子の他、線刻の入った鉄鏃・鉈・鉾先・鉄斧・毛抜状鉄器等の鉄製副葬品277点、琥珀製小玉や管玉・白玉・鉄釧・イモガイ製腕輪等の装身具123点など、副葬品も豊富に出土した。なお、地下式横穴墓に伴わない土器溜りが2箇所検出され、墓前祭の可能性が指摘されている。

これ以後、遺跡の発見例は急激に減少し、地下式横穴墓の終焉である6世紀前半から9世紀に至るまでは歴史的に全くの空白となる。丁度その時期に当たる遺跡も発見されていないため、想像の域を出ないが、当地域は古代朝廷において認知されていた「霧島(岑)神」の住まいである霧島山の麓に位置していることから、この時期はすでに人の生活を受け入れられないような山林地帯だったのではないだろうか。

しかし、9世紀に入ると、現在の町域の数箇所でも同時多発的に開墾が行われている。住居跡などはあまり検出されないのに対し、畠と思われる畝状遺構が多数検出されている。この時期の遺跡のうち発掘調査が行われたのは、荒迫遺跡・立山遺跡・大鹿倉遺跡・川除遺跡・大谷遺跡・榑粉山遺跡だが、この6遺跡のうち畝状遺構が検出されたのは、荒迫遺跡・川除遺跡・榑粉山遺跡の3遺跡である。このうち、最も広範囲で検出されたのが荒迫遺跡である。しかし、長期間に渡って耕作されたのではなく、9世紀後半から10世紀にかけてのごく数百年間に使用されたと推測されている。又、栽培作物については未だ判明しておらず、川除遺跡や榑粉山遺跡で若干のイネの痕跡が見られた程度で、大方は根菜類の可能性が高い。この一方で、平成13～14年度に発掘調査が行われた宇津木遺跡では、祭祀遺跡と思われる呪術的意味を施したような墨書土器や緑釉陶器・須恵器・石組炉などが検出された。

しかし古代のどの遺跡にも共通するのは、50年程度しか生活痕が残っていない事であろう。土器の型式もさほどの変化は見られない。又、土師皿や磁器類も全く見られない。

これらの畠が使用されなくなった後は、スキなどが生息する野原のような状態になったと思われる。その後はほぼ山として認識されていたようで、鎌倉時代から中世にかけては、荒迫遺跡・大鹿倉遺跡・榑粉山遺跡・宇津木遺跡で狩猟用と見られる陥し穴が数多く検出されている。ただ、かなり散発的・不規則に作られているため、狩猟方法や対象動物などにつ

いては不明である。

第3節 高原町の歴史

高原は、後ろに高千穂峰がそびえている事もあって、以前から天孫降臨の地として認識されていたようである。江戸時代末期、薩摩藩により編纂された『三国名勝図會』には、

土俗傳へ云、當邑を高原と號するは高天原の略称なりと、凡日向国内此辺は、神代の皇都に係り、今に都島都島は今の都城、高城などといへる地名残るも此が爲にて、此地、都島と接し、平砥曠遊、土壤膏腴、土俗の伝亦従ふべし、(後略)

とある。そして、その伝承に沿うかのように山頂には「天の逆(賢)鉾」が立てられている。立てられた時期は不明であるが、江戸時代初期の旅行記にはすでに登場している。ただ、現在の形とは若干異なっている。高千穂峰は、北部の小林方面から南東部の都城盆地をはじめとする周辺地域で、山岳信仰の対象として崇拜されてきた。前述の地には、華立と呼ばれる霧島山の遙拝所が数多く存在する。又、長門本『平家物語』の、藤原成経が治承元年(1177)に鬼界島へ流罪になるくだりで、霧島山に触れた記述があるが、そこでは霧島山を、

彼庄内にあさくら野と云所に、ひとつの峯高くそびえて、煙りたえせぬ所あり、日本最初の峯、霧島のだけと號す、金峰山、しやかのだけ、富士の高根よりも、最初の峯なるが故に、名付て最初の峯といふ、六所権現の靈地也、

と表現している。長門本『平家物語』は、中世に完成したと推定されており、その頃には、霧島山は靈山として認識されていたようである。ちなみに、「霧島山」という名称の山は無い。『三国名勝図會』には、霧島連山の中で最も標高の高い韓国岳ではなく、高千穂峰を霧島山としている。

霧島山の信仰の実体については、史料も少なく、未だ不明の点が多い。まず、古代の文献を見ると、『続日本後紀』『承和四年八月壬辰朔』条に、承和4年(837)に日向国の都農神・妻神・江田神と共に官社に列せられ、従五位上の位が与えられた、とある。又、『日本三代実録』『天安二年十月己酉』条には、前記に続き、天安2年(858)に従四位下に昇格した、とある。しかしこの時は、「霧島岑神」と称されているのみで、具体的な場所を示しているのではなく、山そのものを示しているものと思われる。しかし、この頃にはすでに官社に列せられ、官位を叙されるだけの規模・信仰があったものと思われる。

続いて、延長5年(927)に成立した『延喜式』『十神祇十』には、日向国四座の1つとして、「諸縣郡一座小 霧嶋神社」とある。具体的にどの場所かは不明だが、現在の高原町・小林市付近に立地していたと思われる。周辺社寺の記録には、当時の社殿は高千穂峰と中岳の鞍部の迫門丘(瀬多尾・せたお)にあったと云われている。

承平5年(935)頃に成立したとされる『倭名類聚抄』には、「諸縣(牟良加多)郡」のうちとして、「財部・縣田・菰生(宇利布乃)・山鹿・穆佐・八代・大田・春野」の8郷が挙

げられている。この内、財部は現在の鹿児島県財部町、瓜生は現在の宮崎市瓜生野、穆佐は高岡町穆佐と思われる。その他の八代・大田・春野は不明である。この8郷のうち当地方を指しているのは、現在のところ春野郷という説が有力である。

文献に残る最古の霧島山での修行者は、比叡山の僧侶性空である。性空は延喜10年(910)に京都で生まれ、36歳で比叡山延暦寺の慈恵大師良源に師事して出家、九州を中心に修行し、康保3年(966)に播磨国書写山に円教寺を創建した。寛弘4年(1007)入寂。『扶桑略記』『元亨釋書』『朝野群載』『明匠略傳』『性空上人傳』『今昔物語集』には、性空の生涯に関する逸話から、修行時の奇跡などが記されている。それらによると、36歳で出家した後、4年間に霧島山で修行し、その後肥前国背振山へ修行の場を移した、とある。霧島山周辺の寺社も、性空を開祖或いは中興の祖としている所が殆どである。しかし、どの書物も「霧島」と記しているのみで、具体的な場所は不明である。長門本『平家物語』では、御鉢の火口で法華経を読誦し、十一面観音を感得したとある。なお、高千穂峰の東南部にある御池と呼ばれる火口湖があるが、『三国名勝図會』によると、当時、御池には、松・軀瀬(むくらせ)・皇子(おうじ)・劍崎(つるぎさき)・刈茅(かるかや)・柳・護摩壇(ごまんだん)、7つの港があり、そのうち護摩壇港の上には、性空上人が護摩行を行った跡がある、という伝承を記している。

上記のように、古代については、人の生活痕ではなく、信仰面での歴史の方が圧倒的に多い。発掘調査においても、上記のように検出されるのは祭祀か墓遺構のみで、非常に不明確な歴史である。大体は草原か、修行の場となるほどの深い山林地帯であったようである。その後の遺構も狩猟用の陥し穴のみで、その山深さが窺える。又、この時期は、近世に多く作成された寺社記などでは、御鉢の噴火が最も多かった時期でもある。こういった面も、当地から人の生活を引き離していったのではないだろうか。

中世、特に15世紀に入ると、南九州の勢力争いに当地も巻き込まれるようになる。この頃の当地方は、都城盆地を中心とした三俣院と、現在のえびの市を中心とした真幸院の境界線に当たっている。木脇家文書『三俣院記』には、「夫日州諸縣郡三俣院者、霧島山之面、者境軀肥、者境高原」と記されている。三俣院は島津庄の一円庄の一つで、これによると、霧島山に面し、軀肥・高原を境としている。一方、同家文書『真幸院記』には、「夫日州諸縣郡真幸院者、為霧島山之北面、東者境小林、北者境求摩、西境栗野流六里余也」と記されている。真幸院は同じく島津庄の寄郡の一つで、霧島山の北面に位置し、求摩(琢磨、人吉)・栗野・小林を境としている。両書に従うと高原と小林の境が両院の境であったようである。『三俣院記』『真幸院記』は江戸時代に編纂されたが、中に含まれている文書は中世に作成された可能性が高い。しかしながら、他の古文書では、小林の内に高原が含まれていたりするなど、この時期の高原と小林の境界自体が非常に曖昧であるため、実際は頻繁に境界が変わっていたのではないだろうか。永濱家文書『高原所系図老冊』では、天文20年(1551)に北原氏領内となり、元龜元年(1570)に伊東氏の領内になった、とある。

まず『高原所系図老冊』を参考にして、中世における高原の支配体制を概観すると、

○16世紀前半は高原・江平・志和地・野々美谷・高崎は1箇所の領地

○天文14年(1545)頃は稻津豊前が地頭となる。

○天文20年(1551)頃から北原勘解由次官の領地となり、白坂式部太夫が地頭となる。

○元龜元年（1570）に伊東氏が北原氏を攻め、高原を領する。

○元龜3年（1572）に伊東衆の九岐因幡守が地頭となる。

○天正3年（1575）に島津氏が伊東氏より高原を奪い取る。

となっている。『高原所系図老冊』は天保4年（1833）に旧書を改めたとされている古文書だが、中世の部分は不明確な点が多い。

一方、『三俣院記』『的野寺社屋敷次第帳写』によると、

○天文年間（1532～54）以前は、税所右衛門が領主だが、真幸院の白坂下総守に追討され、白坂氏の領地となる。

○永禄年間（1558～69）に伊東氏が領有し、同勘解由を高原城主とする。

○天正4年（1576）に島津氏が領有する。

とある。

これから類推すると、少なくとも16世紀に入ってから、（税所氏→）北原氏→伊東氏→島津氏という支配体制の変化が確認できる。高原は、日向国と大隅国の国府付近を結ぶ要衝である事から、伊東氏・北原氏・薩摩国の島津氏の3氏による争いが続き、現在の市街地に位置する高原城は、3氏の勢力争いの舞台となった。16世紀半ばに入って伊東氏の領地となったが、天正4年（1576）8月に、島津義久・義弘ら島津勢が攻め落とすと共に周辺諸城も落城し、島津氏の領地となった。ちなみに、『真幸院記』によると、北原氏は応永年間（1394～1428）辺りから真幸院を領有したが、永禄5年（1562）、真幸院領主北原兼守死去に伴う家督継承問題に乗じて伊東氏が領有する事となった。又、白坂下総守については、北郷文書『北郷家譜家譜写』『島津貴久書状写』によると、天文11年（1542）8月20日、伊東義祐・真幸院の北原兼孝が三俣高城の北郷忠相を攻めるものの敗北したが、その時に北郷氏が「北原家臣志和池城主白坂下総守」等を討ち取ったとある。

豊臣秀吉の九州平定以後、島津久保、次いで島津義弘の領地となるなど若干の変動はあるものの、それ以後は薩摩藩領として安定する。その後領内は地頭制が敷かれ、郷（外城）が設置された。地頭については鹿児島から派遣された。歴代の地頭については『高原所系図老冊』に詳しい。その中には、関ヶ原の戦いに参陣した入来院又六重時や新納旅庵、豊臣秀吉の九州平定で激しく抵抗を示した上原長門守尚近、博学で知られる名越左源太などが地頭として当地に赴任している。

近世における高原の領域は、地頭制施行当初は麓村（高原村）・蒲牟田村・入木（後川内）村（以上、現高原町）、前田村・大牟田村・笛水村・江平村（以上、現高崎町）と推定されるが、延宝8年（1680）の領域変更に伴い、前田・大牟田・江平が高崎郷として独立する代わりに、紙屋郷水流村（現都城市）・小林郷広原村（現高原町大字広原）が編入され、新しく5村で構成された。以後、その領域は変わることなく幕末まで続く。『高原所系図老冊』には、度々「無地頭」という記述が見られ、地頭不在を窺わせる。さらに、19世紀前半頃には、高原郷そのものに地頭が派遣されるのではなく、周辺の数郷を地頭1人に一括支配させる居地頭体制が行われた。『高原所系図老冊』によると、当初は小林を中心に周辺の5ヶ郷（高原・加久藤・飯野・須木・野尻）を併せた6ヶ郷請持体制となったが、その後、小林に高原・須木・野尻・高崎を併せた5ヶ郷請持に再編成された。この前半の6ヶ郷・後半の5ヶ郷請持体制が後の西諸県郡の基礎に繋がるものと思われる。

高原郷には、南九州で著名な薩摩街道や肥後街道からは離れているが、鹿児島城下から続

郷（宮崎県東諸県郡綾町）に至るまでの綾往還が郷内を通過していた。ルートは鹿児島城下から国分・霧島を通して小池・御池沿いを廻りながら東御在所両所権現社の参道に出るものである。文化9年（1812）に日向国に測量に入った伊能忠敬一行も東御在所の麓にある蔵川集落より測量を開始し、狭野神徳院に宿泊、麓村を測量しながら通過し、野尻郷との境である猿瀬越まで測量が行われた。

明治時代に入り、明治16年（1883）に宮崎県が設置されると、同年6月には北諸県郡、翌17年（1884）1月からは西諸県郡に属した。その後、明治22年（1889）の町村制施行に伴い、麓・蒲牟田・広原・後川内の4村が合併して高原村が成立、昭和9年（1934）には町村制施行に伴って町に昇格し、現在に至る。

近世の高原は、前述の通り霧島山の麓に位置しているため、宗教的に非常に発展した所であった。平安時代の僧侶性空により修行場としての基礎が作られたという伝承を持ち、中世には島津氏・伊東氏による宗教施設の奪い合いや、中世における島津氏の政策決定手法の「御圖（みくじ）」が行われるなど、宗教的な側面で重要視される方が多かった。特に島津氏による九州制覇の過程では、その支配方法等を霧島山の神意を問う記述が多く見られる。中世末期から近世にかけては、「霧島六所権現」と呼ばれる、6つの寺社が大きな勢力を持つようになった。このうち、高原には、霧島東御在所両所権現社（現霧島東神社）・狭野大権現社（現狭野神社）の他、霧島山中央六所権現社（現霧島岑神社）の別当寺である瀬多尾権現社跡の計3社寺がある。

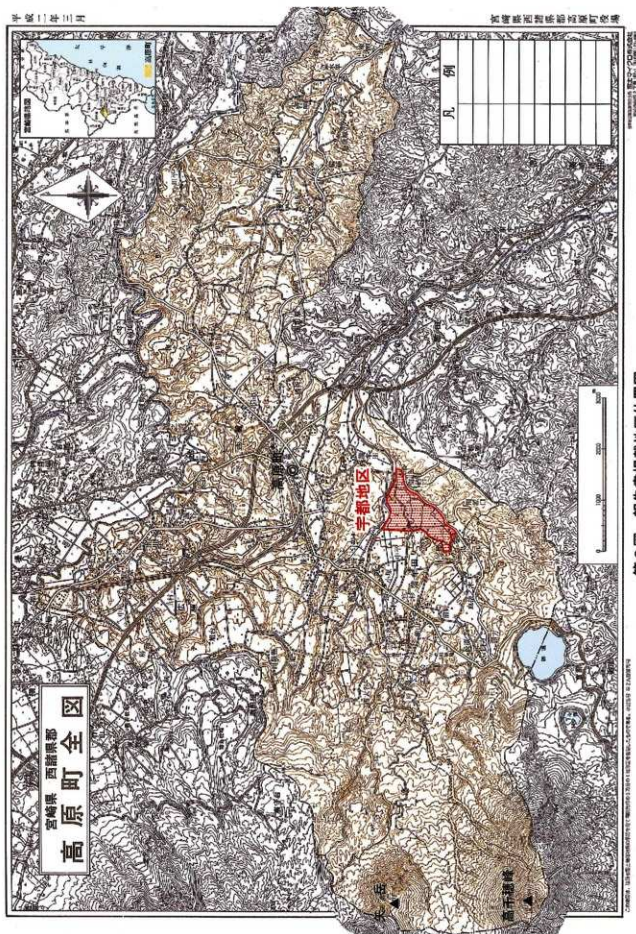
このように宗教的に重要視されている場所のため、神楽等の民俗芸能も多く伝わる。当地方では、神楽の事を「神舞（カンメ）」あるいは「神事（カンゴツ）」と呼称している。高原には、蔵川と狭野の2地区地区に伝承されている。蔵川は毎年12月の第2、狭野は12月の第1土曜日から日曜日の早朝にかけて、夜を徹してそれぞれの地区で行われる。「大宝の注連」と呼ばれる、願成就の際に神を勧請する道具の神籬を立て、天蓋を作るなどした御講屋（あるいは神庭）の中で、山の神信仰にまつわるものや、天の岩戸神話に基づく番付などが行われる。両神舞とも、南九州の神楽分布圏における「霧島神舞」系統の中核に位置しており、真剣を用いたアクロバティックな、「験力」を示すかのような舞が多いのが特徴である。周辺部の神舞が衰退あるいは消滅した現在、非常に貴重な存在となっている。最近では県内神楽の包括的な研究も進み、霧島修験及び神舞と椎葉や阿蘇等の修験や神楽との共通性が指摘されている。又、神舞で使用している面等は、定型化する以前の能面あるいは猿楽面のイメージを色濃く残している事が判明している。

その他の民俗芸能で、著名なものに苗代田祭が挙げられる。地元では方言を用いた「ペブガハホ」と呼ばれている事が多い。「ペブ」は牛、「ハホ」は「主婦・妊婦」を表す方言である。毎年2月18日に狭野神社の本殿前で行われる予祝祈願の田遊び神事的一种である。高原町岩元家文書『神社由緒之事』には、享保元年（1716）から2年（1717）の新燃岳の大噴火により焼失し、文政年間に新たに木牛を作成した、とある。これにより、17世紀後半には祭が行われている事が判明している。又、文政年間に作成された木牛も残存している。

その他、南九州に広く分布する棒踊りや奴踊り・臼太鼓踊り（最近になり消滅）などの民俗芸能の他、鹿児島県の知覧町や甑島で有名な十五夜の綱引き神事などの民俗行事も残存している。

【参考文献】

- 石川恒太郎 1972『高原油田期包含層調査報告』『宮崎県文化財調査報告書』第16集 宮崎県教委
- 石川恒太郎 1973『高原油田ノ崎地下式古墳調査報告書』『宮崎県文化財調査報告書』第17集 宮崎県教委
- 石川恒太郎・日高正晴・岩本哲夫 1976『旭台地下式古墳発掘調査』『宮崎県文化財調査報告書』第19集 宮崎県教委
- 岩本哲夫 他 1980『日守地下式横穴(古墳)54-1~4号発掘調査』『宮崎県文化財調査報告書』第22集 宮崎県教委
- 岩本哲夫 他 1981『日守地下式横穴(古墳)55-1~4号発掘調査』『宮崎県文化財調査報告書』第23集 宮崎県教委
- 岩本哲夫 1981『日守地下式古墳群確認調査』『宮崎県文化財調査報告書』第24集 宮崎県教委
- 渡田雅昭 2001『宮崎県高原油田日守地下(立坑)式横穴墓群』『墳丘のない墓の調査研究』平成9-12(1997-2000)年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))実績報告書(補訂) 天理大学遺跡探査チーム
- 面高哲郎・長津宗重他 1991『立切地下式横穴墓群』『高原油田文化財調査報告書』第1集 高原油田教委
- 大塚康宏 1999『日守地下式横穴墓群』『高原油田文化財調査報告書』第4集 高原油田教委
- 大塚康宏 1999『大谷遺跡表探掘土器資料』『高原油田文化財調査報告書』第4集 高原油田教委
- 大塚康宏 1999『川除遺跡』『高原油田文化財調査報告書』第5集 高原油田教委
- 大塚康宏 2001『高原油田城跡の調査』『高原油田文化財調査報告書』第8集 高原油田教委
- 大塚康宏 2003『新粉山遺跡—古代遺構・遺物調査—』『高原油田文化財調査報告書』第10集 高原油田教委
- 大塚康宏 2004『宇津木遺跡』『高原油田文化財調査報告書』第12集 高原油田教委
- 高橋正樹・小林哲夫 1999『九州の火山』築地書館株式会社
- 中野和浩 1998『地下式横穴墓の群構造』『宮崎考古』第16号 宮崎考古学会
- 永松敦 1993『狩猟民俗と修験道』白水社
- 永松敦 2002『平成14年度特別企画展 椎葉の修験道文化』椎葉民俗芸能博物館
- 野口逸三郎監修 1997『宮崎県の地名』日本歴史地名体系46 平凡社
- 原口虎雄監修 1982『三國名勝圖會』第4巻 図書出版青潮社
- 日高正晴 1989『高原油田高校遺跡』『宮崎県史 資料編 考古1』宮崎県
- 宮崎県教育委員会文化課編 1997『大谷遺跡』『宮崎県文化財調査報告書』第40集 宮崎県教委
- 宮崎県史編纂室編 1991『宮崎県史 史料編 古代』宮崎県
- 宮崎県史編纂室編 1990『宮崎県史 史料編 中世1』宮崎県
- 宮崎県史編纂室編 1994『宮崎県史 史料編 中世2』宮崎県
- 宮崎県史編纂室編 1996『宮崎県史 史料編 近世5』宮崎県
- 宮崎県史編纂室編 1999『宮崎県史 別編 民俗』
- 宮崎県農政水産部農村建設課編 1995『土地分類基本調査 西諸県・北諸県地域 霧島山』宮崎県
- 山口保明 2000『宮崎の神楽 祈りの原質・その伝承と継承』笠野社
- 横手浩二郎 1994『宮崎県西諸県郡高原油田大谷遺跡表探掘の縄文土器』『南九州縄文通信』No.8 南九州縄文研究会
- 和田理啓・久木田浩子 1998『荒迫遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第11集
- 渡辺伸夫他 2000『高原油田・狭野の神舞(神事)』『高原油田文化財調査報告書』第7集 高原油田教委



第Ⅱ章 宇都地区圃場整備事業に伴う試掘調査

第1節 遺跡の概要及び調査にいたる経緯（第3図）

宇都（うと）地区は、高原町の南部、蒲牟田地区に位置する。高崎川の南側には、霧島山系から続く狭野開析扇状地群が広がっており、今回報告する宇都地区は、この狭野開析扇状地群から派生した低位扇状地が分布している。元々は、小さな丘がいくつも点在するような地形であったが、終戦を機に、個人あるいは地区主体による開田作業が行われた。それにより、点在していた小さな丘は殆ど平地化したため、現状では平地のように見える。そのため、戦争以前の地形を推測するのが非常に困難な状態である。

当地区は、平成8～9年度に実施した「町内遺跡詳細分布調査事業」においても、遺跡が発見できなかった地区である。過去にも遺跡が存在したという話は聞かれなかった。しかし付近には、神武天皇が住まいしたと云われている「宮の宇都」、東征に向かう際に川を渡った「狭野の渡」など、何らかの歴史的遺物の存在をうかがわせるものがいくつかある。これについては、江戸時代中期頃から「聖蹟」として認識されていたようで、前述の「宮の宇都」は、江戸時代末期、狭野神徳院住持の光盤により社殿が建立された。

今回の調査は、宇都地区圃場整備事業に伴って実施した試掘調査である。平成14年度に高原町農村整備課・宮崎県西諸県農林振興局より事業の概要を伝えられた。それを受けて、県文化課・町社会教育課・町農村整備課・県西諸農林振興局の各担当4者での協議の結果、工事の際に切り土になる部分のみを調査の対象とする事になった。その協議の結果を踏まえ、事業側に切り土の想定部分を現地形図に落としもらい、それをもとに試掘調査箇所を設定した。さらにその資料をもとに、事業側が地権者の同意を取った結果、7箇所が調査可能となった。それを受けて、高原町教育委員会が主体となり、宮崎県教育委員会文化課の指導のもと、まず遺跡の有無、次に遺跡が存在した場合の層序等の調査を実施した。以下、水田毎に説明する。

第2節 調査組織

調査主体 高原町教育委員会

社会教育課 課 長	境 和 彦（平成14年度）
	黒 木 嘉 民（平成15年度～）
係 長	益 本 一 博
主 事	大 學 康 宏（調査・庶務担当）

事業主体 宮崎県西諸県農林振興局

農地整備課 主 査	谷 口 司
高原町役場農村整備課	
農村整備係 係 長	氏 益 幸 生（平成14年度）
	黒 木 美 利（平成15年度～）
主 事	中別府 和 也（平成14年度）

調査指導 宮崎県教育委員会文化課 主 査 飯 田 博 之
作業員 岡元一 川畑英春 黒田修昭 黒田妙子 高原実 高原洋子 坂口由久
大鼓重雄 中馬和子 広田毅 三角園栄子 宮田信子 向井久枝
山口江美子 山口美栄子 横山第二

第3節 調査の成果（第4～8図）

試掘調査は、圃場整備の計画策定や地権者の許可取得などの諸事情により、平成15年度から平成16年度にまたぐ形で行われた。調査期間は、平成16年3月22日から31日まで、続く4月5日から14日までの延べ15.5日間（うち1.5日は整理作業）である。

調査対象地は、7枚の水田である。ただ、前述の理由により、旧地形が把握できない状況なので、1枚に対する試掘坑の数も、通常よりも多くしている。その部分については、地権者の同意も取りながら進めた。掘削については全て人力で進め、埋め立てについては、高原スコリア及び表土については重機を使用して埋め立てた。

以下、その試掘調査の成果を記載する。

（1）大字蒲牟田字中平4322番地2

試掘坑を2箇所設置した（Tr-1・2）。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。表土下は、川砂のような砂・礫層が交互に堆積し、地表下約1.5m付近で青灰色の混じり気のない粘土が見られた。さらにその下には通常見られるような黒色土などが見られるが、大方は砂層で構成されている。さらにその下に鉄層が見られると想定したが、試掘坑周囲から水が染み出し、粘土が崩壊し始めたため、掘削を取り止めた。

（2）大字蒲牟田字山神平4727・4649・4650番地

試掘坑を4箇所設置した（Tr-3～6）。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。西側は霧島高原スコリア（Kr-Th・11～13世紀）が削平されていたが、東側は残存していた。又、青灰色・白色交互堆積火山灰層の霧島大谷第3テフラ（宮杉スコリア・Kr-Ms・11世紀？）や赤色火山灰の霧島大谷第2テフラ（Ot-2）・黒褐色の霧島大谷第1テフラ（片添スコリア・Kr-Kz・11世紀頃）等の鉄層も残存していた。御池ボラ層（Kr-M・約4,200年前）まで掘削したが、人為的なものは見られなかった。

（3）大字蒲牟田字宇都前4723番地

試掘坑を3箇所設置した（Tr-7～9）。Kr-Th・Kr-Ms・Kr-Kzの鉄層も良好に残存していた。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。層序の状況等は（2）とほぼ同じである。

（4）大字蒲牟田字山神平4665番地1

試掘坑を2箇所設置した（Tr-10・11）。Kr-Th・Kr-Ms・Kr-Kzの鉄層も良好に残存していた。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。（2）（3）とほぼ同じである。

(5) 大字蒲牟田字大久保7782番地1

試掘坑を2箇所設置した(T r-12・13)。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。南東側にある尾根より下る斜面を造成して水田としているため、調査区北東側(川に近い所)は整地土が分厚く、Kr-Th直下で掘削を留めた。Kr-Kz直下は黒色土のみが堆積しており、他の地区と層序が少し異なっている。

(6) 大字蒲牟田字宇都前4820番地1

試掘坑を4箇所設置した(T r-14~17)。調査の結果、4箇所全で遺物が出土した。遺構は掘削の範囲が狭いため確認できなかった。他地区と同様、東側以外はKr-Thが削平されているものの、Kr-Ms・Kr-Kzは比較的残存していた。遺物はKr-Kzよりも下層の黒色土及び茶褐色土周辺で出土している。時代は小片のため断定はできないが、一部土器に穿孔のような痕跡が見られる事や、器面に丁寧なヘラ工具によるミガキ調整を施している事から、弥生時代から古墳時代の土器と思われる。文化層は遺物の出土状況から2層ないし3層と考えられる。Kr-M近くでは遺物は確認されなかった。

(7) 大字蒲牟田字宇都前4856番地1

試掘坑を4箇所設置した(T r-18~21)。Kr-Thは南側にしか残存していなかったが、Kr-Ms・Kr-Kzは良好に残存していた。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。層序については上記試掘箇所とほぼ同じである。

第4節 まとめ

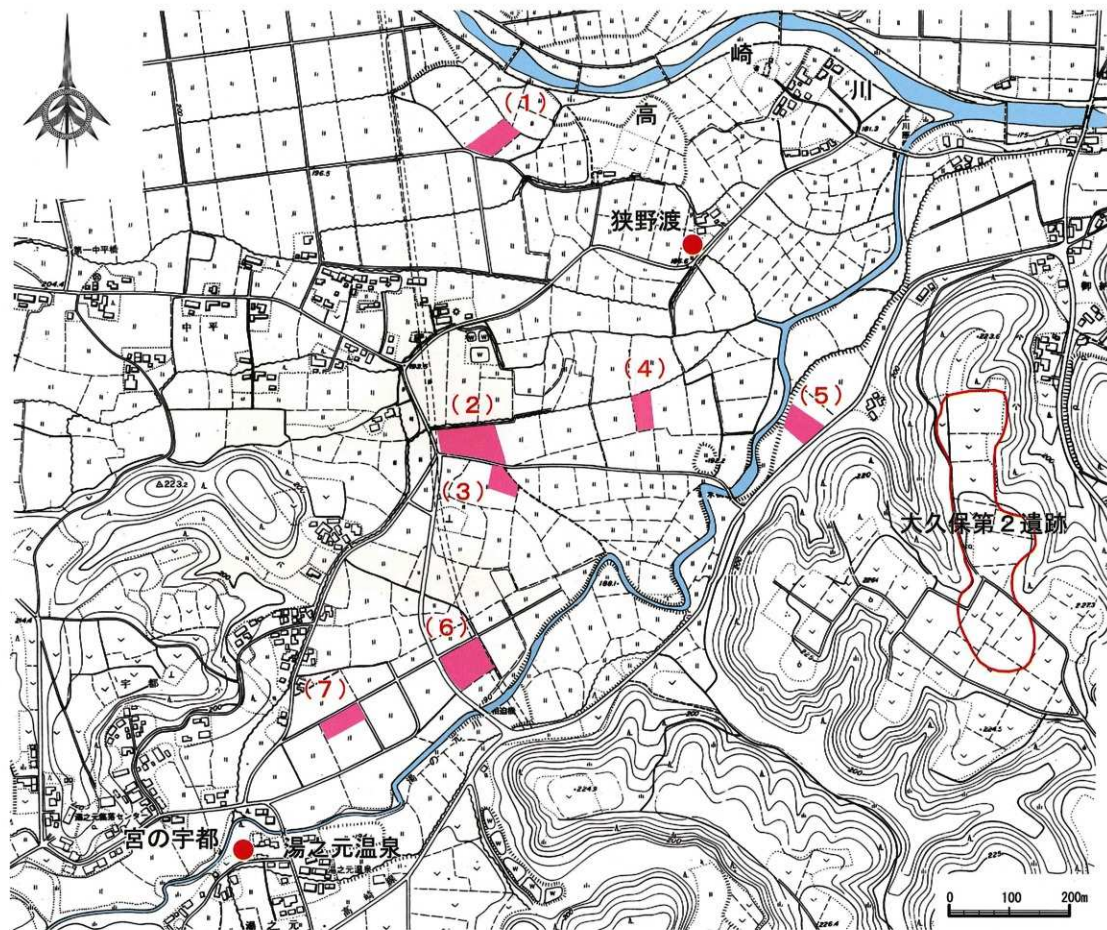
上記の試掘調査の結果、(6)の地点から土器が出土し、遺跡が1箇所存在する事が判明した。当地区周辺は、比較的早くに開発が行われた事も一因にあると思われるが、前述の通り遺跡の検出例が全くなかった。今回の事業区を含めた湯之元川周辺は、平成7年度より、南狭野・祓川・湯之元地区と、大規模な圃場整備事業が進められた。その度に試掘調査を実施していたが、遺跡の痕跡は全く発見できなかった。今回の調査の大きな成果は、湯之元川周辺で初めての遺跡を検出した事である。ただ、遺跡の性格・内容については、包含層と思しき土層からの出土であるため不明である。したがって、どのような遺構が検出されるかも不明である。

その他の地域については、遺跡の痕跡は全く見られなかった。遺跡の存在が確定した(6)近辺の(3)(7)でも見られなかった。(2)(3)(4)(5)(7)については、ほぼ同一の層序を呈している。異質であったのは(1)である。調査中、地元の方から「この辺りは川だった」という話を度々聞いた。しかし、現在の川との高低差があり過ぎ、一概に断定は出来ない。

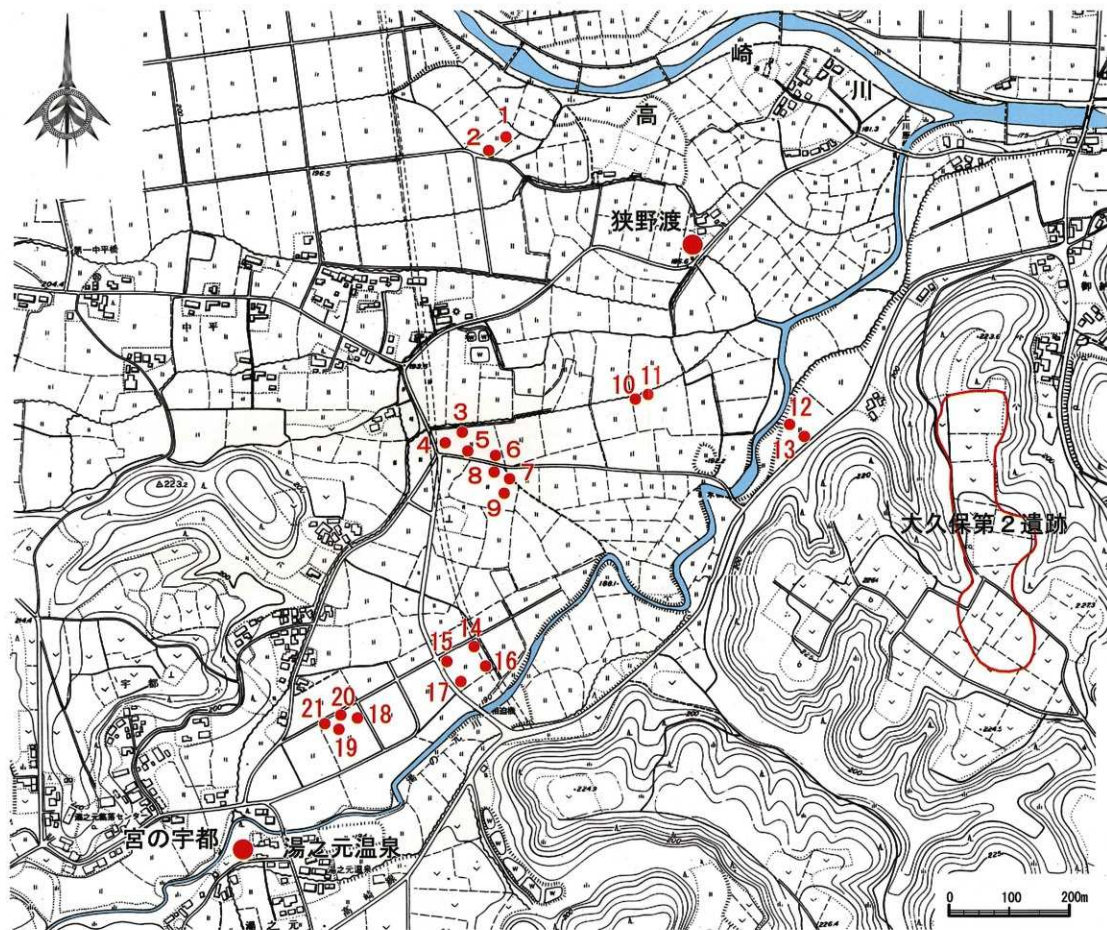
この試掘調査を受けて、平成16年7月21日、上記の各担当4者による協議の場が持たれた。上記の試掘調査について報告し、調査の日程などを協議した。平成17年5月頃に圃場整備の計画の詳細が決まるので、具体的な調査日程については、5月まで待たなければならない。

とりあえず、遺跡が確認された（6）については、圃場整備の計画が決まり次第、発掘調査と事業との調整を行う事とした。

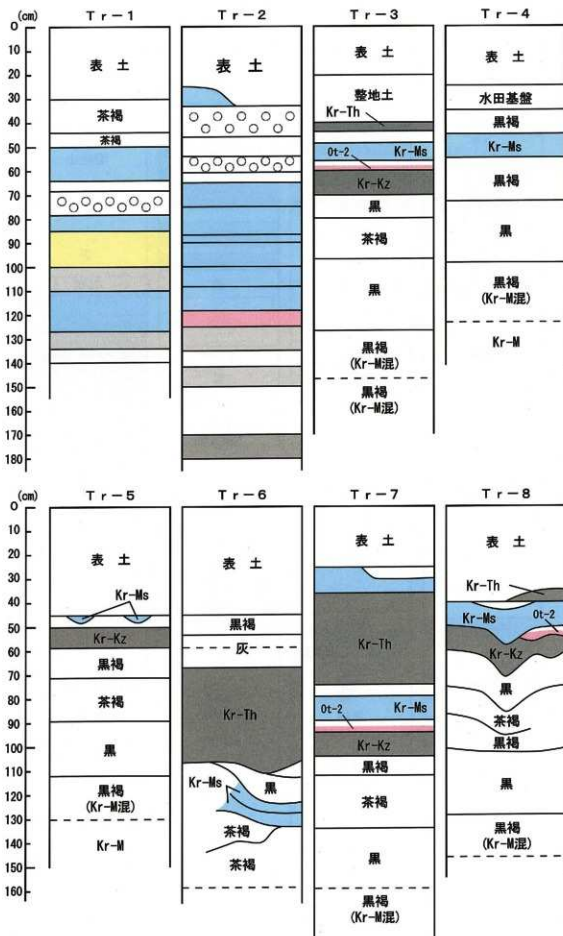
今回の試掘調査は、圃場整備の全体計画から見ると、ごく一部である。前述のように遺跡が確認された以上、他にも遺跡の存在する可能性が高い。引き続き未調査部分について試掘調査をする必要がある。



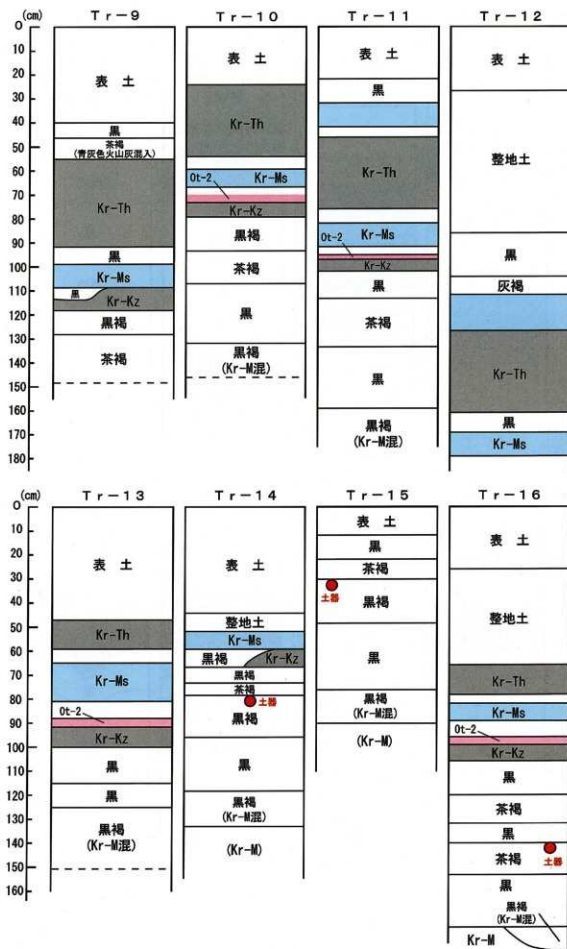
第4図 宇都地区試掘調査における地区位置図



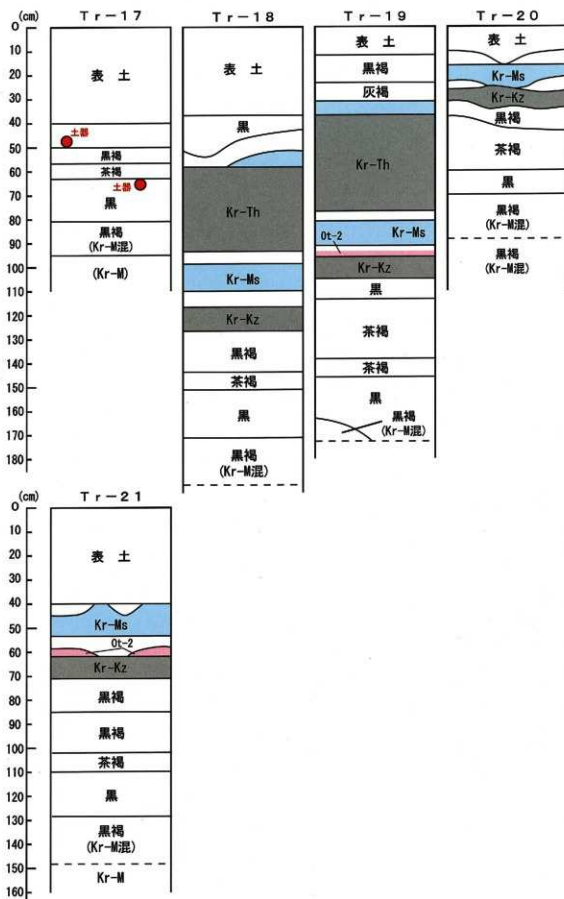
第5図 宇都地区試掘坑位置図



第6図 宇都地区試掘坑層序 (1)



第7図 宇都地区試掘坑層序 (2)



第8図 宇都地区試掘坑層序 (3)



1. 地区(1)遠景



2. Tr-1層序



3. Tr-2層序



4. 地区(2)远景



5. Tr-3層序



6. Tr-4層序



7. Tr-5 層序



8. Tr-6 層序



9. 地区 (3) 遠景



10. Tr-7層序



11. Tr-8層序



12. Tr-9層序



13. Tr-10 層序



14. Tr-11 層序



15. 地区(5) 遠景



16. Tr-12 層序



17. Tr-13 層序



18. 地区(6) 遠景



19. Tr-14 層序



20. Tr-15 層序



21. Tr-16 層序



22. Tr-17 層序



23. 地区(7) 遠景



24. Tr-18 層序



25. Tr-19 層序



26. Tr-20 層序



27. Tr-21 層序

28. Tr-14出土遺物



29. Tr-15出土遺物



30. Tr-16出土遺物



31. Tr-17出土遺物



報告書抄録

フリガナ	チヨウナイイセキ					
書名	町内遺跡Ⅴ					
副書名						
巻次						
シリーズ名	高原町文化財調査報告書					
シリーズ番号	第14集					
編集者名	大 學 康 宏					
発行機関	高 原 町 教 育 委 員 会					
所在地	〒889-4492 宮崎県西諸県郡高原町大字西麓899番地					
発行年月日	2005. 3. 31					
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
ウトチクイセキ 宇都地区遺跡	カハチヨウダイジ 高原町大字 カハムラ 蒲牟田4322-2 外	31° 54' 00" 付 近	131° 00' 00" 付 近	20040322 ～ 20040414	90㎡	宇都地区 圃場整備 事業
種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
散 布 地	弥生時代 古墳時代	なし	土師器	・宇都地区において初めて 遺跡が確認された。		

高原町文化財調査報告書 第14集

町 内 遺 跡 V

2005年3月

編集・発行 宮崎県高原町教育委員会
〒889-4492 宮崎県西諸県郡高原町大字西麓899
TEL 0984-42-2111

印刷 (株)長崎印刷
西諸県郡高原町大字後川内18-2